

＜事例研究＞カウンセリングによる

キャリア教育の試み

—進路に悩む高校生の語りに同伴して—

赤岡 美津子

I・はじめに

キャリア教育において、来談者中心カウンセリングの理論と手法を採り入れることは、生徒達の未来像追求の促進や動機付けに有効である(赤岡 2011)。今回はカウンセリング事例からその軌跡を辿ってみたい。

A君は、高校3年生である。大学受験を控え、彼は自身について自問する。また、父への批判や過去の鬱積した思いも吐露される。そして、自明の事として存在したかに見えた大学受験についても、その意味をも問い直す。学校や家庭での日々の出来事などを折り交えて上記の事を考え、且つ語った。

それを通して彼は、進路を決定した。大学受験を決定し、志望校に合格し、入学していった。彼の模索は更に続くであろうが、「青年期」の発達課題である「自我同一性」確立に向けて、歩を進めた事は確かである。面接は21回、約11ヶ月であった。

尚、個人の特定を防ぐため、カウンセリングの流れを損なわぬ範囲で内容を変更した。

II・事例の概要

【主訴】 父親の事。学校の事。受験の事。友人の事。(本人の記述による。)

【家族】 父；49歳・教員 母；43歳・専業主婦 妹；16歳・高校2年生

【生育歴・問題歴】

公立小学校出身。友達も多く、よく遊んだ。ガキ大将ともウマがあい、楽しい小学校生活だった。4年生から塾に行っていたが、「生活の一部」として「自然体で」こなしていた。途中で父の意向で特進クラスに移ると、最初の時間か

ら違和感を持った。自分のペースで問題を解いていたら、速度も競っていたらしく、「生まれて初めて」取り残されたような、ばつの悪さを感じた。

父は自分の学歴に劣等感を持っている。そして「自分だけの力で切り抜けてきた。」と言う。僕には、「学歴が大切。それが得られる大学に入れ。」と言いつづけている。

父や塾が勧める中学校を受験し、合格した。「僕は仲の良かった人達を切り捨ててここにいる。どうせみんなも切り捨ててきた人達だ」と思うと全てが「嘘っぽく」思えた。

入学当初は友達を作ろうと無理もしたが、次第に気疲れするようになっていった。どんな顔をして「お早う。」と言えよいいのか、廊下ですれ違った時どんな間合を取ればよいか等々1つ1つ悩んだ。クラブは書道部に入ったが、1年生は僕だけだった。体育祭の団体競技でも、当日になって相手が欠席してしまい、取り残されてしまった。

僕は父の言に従って受験し入学した。そこで失ったものは多い。大学に進学したとしても、再び何かを失うのではないかと思う。このまま受験すれば、父の考えを認めた事になる。持ち続けてきた悔しさが、闇に葬り去られてしまう。

【臨床像】 中肉中背で健康な顔色をしている。折り目正しい服装で、シャツにはさり気なくアイロンが掛けられている。低い声で淡々と、しかしよく語る。以上、#1；X年5月、#2；X年6月の面接からである。

【当初の課題】①大学受験に関して、主体的な決定 ②そのための、自尊感情・自己効力感の向上 ③父との葛藤の、それなりの整理

【対応】 原則として週1回の定期面接の設定。

Ⅲ・事例の経過

A君の言葉は「」、筆者は<>、引用は『』で表す。

#3；X年6月

「思い出したのですが。」と言ってA君は語り出す。「体育祭の組み体操の時の事だけれど、帰って父に話すと『それは災難やったな。』ではなく、『お前がしっかりしないからだ。』と言われた。分かっていないと思った。父への

不信感を明確に自覚した最初だった。」

「進路のことも、あれから考えていた。父は、とにかく社会的に評価される仕事に付けという。しかし僕はまだ、将来何がしたいのか分からない。会社員か何かになって、1人で生きて親の世話をしながら休日に好きな事をやっているのではないか。」「受験の時も入学してからも、勉強をすればよい事があるとずっと言われてきたけれど、この学校にいて、疑問に思う。成績の良い人が評価され、悪い人は内心軽蔑されて道化のように振る舞っている。見ていると虚しくなる。」

＜勉強は思考訓練である事は確かで、現にそれが貴方の考える力・批判する力・言語化する力・迷う力・悩む力などになっていると私は思います。17歳の課題をしっかりとこなしていると思いますよ。＞

4 ; X年7月

「ホームルームで文化祭の相談があった。高等部は、全クラス対抗の演劇コンクールをする。入賞しなければと思っている。」「僕のクラスは『新リア王』と決まった。『リア王』の3人の娘を息子にした。この方が実感が湧く。」＜すごいですね。＞と思わず言うと、「実行委員会の人はすごい。」「僕は舞台装置で背景を描く事になった。書道部の部長をしているので、その特色を出して欲しいと言われた。」

5 ; X年7月

「放課後は毎日、文化祭の準備をする。皆が各々喋っている声がわあーと耳に入ってくると、何だか虚しくなる。」

「中学に入ったら、僕は解放されると思っていた。親から命令される事と、学校のシステムから。」＜学校のシステムからの解放って？＞「塾へ行っている生徒を敵視して、授業も勉強をしない生徒を中心に進める。伸びようとする生徒を押さえつける。公立中学校に行けばそれがまた続く。合格すれば解放されると、期待していたのに。」「光っている人がいる。スポーツも勉強も出来る人、個性的な人、特技を持っている人、いろいろ多彩。僕は何もない。」

＜貴方はそんなに自分を深く厳しく見詰め、感じた疑問を疎かにせず、言語化

をしている。それはすごい事ではありませんか>

6 ; X年7月

「舞台背景は書道の特色を出して欲しいという事だったので、白と黒で書の雰囲気やベースに、シンプルなデザインにしている。結構楽しい。」「僕は、こういう方面、デザイン関係に進むのも良いかなと思いついている。そうすると、普通の大学へ進んでも回り道のような気がする。僕はこのままの状態受験したくない。」

「父には腹が立つ。他には厳しく、自分には甘い。何時もそうだ。この間も、何かの締め切りに間に合わず、電話口でぺこぺこして謝っていた。」

< 貴方の思いを、またお父様に話してみるという事もありますよ。 >

7 ; X年8月

「父に話したけれど、言い訳と考えの押しつけだけだった。」「勉強をしても、身が入らない。最近、造形・デザイン関係に進みたいと思いついていたが具体的なイメージが湧かなかった。でも話している内に輪郭が出来てきた。いま学校でやっている舞台装置やインテリア、環境デザインのようなことかな。父にそれを話すと、『それは賛成。しかし学歴がないと相手にしてもらえないから、ちゃんとした大学へ行け。現実を見詰めろ。』とまた同じ事を言う。」

「僕は恐いのです、このまま大学に行き、又あの時の気持ちを味わうのが。」
「小学校から私立の中学校に入って多くの物を失った。心の通う友達や、楽しい時間や、明るい空気や……。」「中学校受験は父の路線に乗せられてやったこと。合格して、何ひとつ楽しい事のない5年余りがあった。このまま大学受験すると、それらを肯定し、容認したことになる。でも、一他方で僕は補習授業に行き、予備校の夏期講習に通っている。」

< 過ぎ去った年月は取り戻せないにしても、その歳月は苦渋に満ちた物であったという事を分かって欲しいと言うことでしょうか。 > 「そうです。そうすると今までの事を認めたことにも、父に流されたことにもならない。受験についてもまた気持ちが変わってくる。」

< またお父様に話してみたら如何ですか。押し付けはあるにしても、貴方の話

を聞き、話し合うことはなさっていますから。>

8 ; X年 8月

「先週で夏期講習が終わった。家でのおんびりと、ビデオを観たり。」「戦争物をよく見る。でも、戦争スペクタクルとか英雄譚は好きではない。『グリーンベレー』『地獄の黙示録』『Uボート』『プライベートライアン』が良かった。『ブリキの太鼓』も良かった。」<そういう傾向のものが好きなのですね。それにしても『ブリキの太鼓』とはすごいですね。難解な映画ですのに。>

「この間言っていた事を父に話した。理解したかどうかは不明。『何をするにしろ、大学で幅広く勉強しておくことは大切だ。』と言う。うまく反論出来ず『説得』された。」「説得された以上、受験しなければならない。だから受験する意味を自分で見付けなければならないと思っている。」

<思いついた事をメモしておく、整理がし易くなりますが。>

9 ; X年 8月

「メモを基に考えを整理するようにしてみた。その中で自分の思考傾向に気付いた。」「自分は物事に対して解決志向ではなく、マイナス要因ばかりを探す傾向にあること、また、立場がはっきりしている所では振る舞いやすいが、それが曖昧だと途方に暮れてしまうという傾向。ここでは、カウンセラーと来談者という立場があるから安心感がある。」

「父とは意見が異なり、気持ちを理解してくれないが、僕のことを大切に思ってくれていることには確信がある。僕が家の中で大切な存在であるとの思いに、揺るぎはない。」

「学校でも仕事を任されると自分の立場が実感出来る。」「去年の体育祭の時も、実行委員会からプログラムの表紙を任された。体育科教師陣からクレームをつけられたが、僕1人でやり合い、結局僕の場合を通した。」

10 ; X年 9月

「文化祭準備は、立ち稽古が始まった。音楽の方も曲が出来上がった。作曲した人が合唱指導もする。」「背景画は、普遍性を持たせる為に抽象的でシンプルな物にした。」「これが終わったら後は受験勉強だけだから、皆頑張っている。」

る。僕のクラスは1度のも入賞したことがないので、優勝は出来なくても、せめて入賞はしたいと思う。」

<人間関係に緊張感があったり、『嘘っぽく』思えたりしていても？>

「学校に不満があっても、クラスの人に対してではない。責務は果たします。」

「去年の担任の先生は定期面談の時、プログラムの表紙の事を言ってくれた。その事に触れてくれたのはその人だけだった。僕はその先生が好きだった。今の担任は自由にさせてくれる人。皆も十分に弁えている。」

1 1 ; X年9月

「文化祭まで10日余りになった。舞台背景はもう実物に掛っている。コーラスも迫力が出てきた。皆楽譜を見ただけで歌える。僕は皆の歌を聴いて覚えている。」「『リア王』を息子の側からの物語に脚色するなんて、僕には想像出来ないことだ。」「これが終わったら受験一色になる。だからしっかり自分の部署をやろうと思う。」

1 2 ; X年9月

「演劇コンクールは優勝でした。」と笑顔で言う。「審査員全員が満点をつけてくれた。講評でも褒めて貰った。」「シリアスなテーマを独り善がりにならず、説得力を持って表現している。舞台装置も照明も音響も、無駄を削ぎ落とした美しさがある。台本やコーラスがオリジナルであるという創造性が素晴らしいと。」「僕も嬉しかった。自分のやるべき事をしっかりやったから。」「僕のクラスはそういうクラスなのです。実行委員の発案が、素晴らしかった。」

「大学は受験することに決めた。今年はB大学C学部1本で。もし駄目だったら1浪してその時はD大学なども考える。」

1 3 ; X年10月

「センター試験の申込みをした。本気になって受験勉強をしようと思う。」

<最近お父様の話が出ませんが、お父様の事との折り合いはどんな風に？>

「父の問題はとても根深いと思う。だから受験とは分けて考えようと思った。この前もまた父と喧嘩した。」「父は結局、『僕は僕、お前はお前、それぞれ別の人間だ。』と言うので、『同じ家族なのだからそれでは困る。お父さんが

“僕は僕”と言う事で、今まで随分家族が傷ついてきた。』と言うと、『出て行け。』『お前はこの頃生意気な事ばかり言う。』と怒鳴ったので、『僕はまだ自分では生きられないのでそんな事言われたら困る。言わないで欲しい。』と言った。「妹が『何時まで経っても成長しないね。』と言ったので、もつとがっかりした。僕は人からはそんな風に見られているのだと思った。」

14 ; X年10月

「受験勉強を始めた。初めて自分の意志で決定した。だから自分で責任を持つ。もし合格したら自分の意志でやりたい事を見つけよう。卒業して、早く親から独立したい。」「父への思いは解決していないが、物事は一気には変わらない。自分に力をつけるしかない。」

15 ; X年11月

「学校は今、とても引き締まった感じだ。」「大学に行かなくて、自分の思いどおりに生きた人は素晴らしいと思う。だけど受験して大学生になってしまうと、大学へ行かなくても素晴らしい生き方があると言えなくなってしまう。」

＜それは、富と名声を得た人が『人生お金や名誉じゃないよ。』と言う、あの嘘っぽさのようなもの？＞「そうです。試験を受けてしまうと、この6年近くずっと考えてきた事が——生きる事は学歴ではない——言えなくなってしまう。もうそんな自分に戻れないというやり切れなさ。僕はそんなに優れた人間じゃないし、大学へ行って、適当に好きな事をして、4年か6年たったら仕事という事になるのではないかと。」「喪失感を感じます。もう戻れないという……。」

＜決定するという事は、他を捨てる、喪失するという事ですものね。決定の方向に歩を進めようとしつつ喪失したものへの愛惜に立ちなずんでいる、そんな感じでしょうか。＞

「そんな感じです。僕は余り本を読まないが、とても感動したのがある。正規の学校教育を受けていない哲学者で建築にも関わりがあって、1つだけ作品を残した人。」「僕も何時か——多分年老いてから——本を書いてみたい。」

16 ; X年11月

「先週妹と言い争った。」「妹は勉強もクラブも生徒会もやっていて、毎日忙しそうだ。妹は僕とは違うなと思った。」「母は僕が神経質になっているのをとても心配してくれている。『お父さんは貴方の気持ちを理解している。』と言う。父と僕の間立って気を揉んでいるのが分かる。」

17 ; X年11月

「この前の日曜日。妹は学校、父も仕事で出掛けていて母と2人の寂しい日曜日で、しかも母は風邪で寝込んでいた。僕は勉強する気満々で、予備校の自習室で勉強しようと思っていた。」「母が送りに出て来てくれて、そのまま寒い玄関で2時間も話し込んでしまった。」「母は、僕の考えている事が分からない、何でも話して欲しい、カウンセリングなんて受けなくて私に相談して欲しいと言う。僕は『相談ではなく、カウンセリングで自分の考えを纏めているのだ。』と答えた。」

18 ; X年11月

< 貴方がこちらへ来られる事について、お母様はその後どんな風に仰っていますか。 >

「その後は何も言っていない。でも、僕がカウンセリングを受けたいと言った時、ここを勧めてくれたのは母なのに。1人で考えていて、自分の考えが親の言うように変なのかどうか、他の人に聞いて貰いたいと思った。親は、友達の中で語り合うものと思っているようだが、僕達は互いに友達に負担を掛けたくない。」「僕は今まで全身全霊掛けて物事に取組んだ事がないと思う。今はそれが必要だと思う。」

< 面接が始まった頃はお父様への思いを語られていましたが、今は自身の問題を見ているのですね。 >

「自分を変えるのは自分の責任で出来るから。それをやろうと思う。」「この間学校の駐輪場で僕の自転車を放り出して、自分のを置いている人を見た。以前の僕なら抗議していたけれど、そのまま帰ってきた。母にその話をしたら『丸くなったね。』と言われた。僕の物と知ってやったのではないのだから。」

19 ; X年12月

「今はセンター試験対策をやっている。」以下、テスト対策が語られる。

「大体計画どおりに出来ている。」「母が疲れている。僕の愚痴を聞いていたのに、僕が受験する事になって『置いてけぼり』を食ったような感じがしているのではないか。」「妹がよく母に食ってかかっている。『僕だったらあんな事は言わないのに』と思うような事を言う。」

センター試験が終わるまで面接は休むとの事、今回は2月の約束をする。

20 ; X+1年2月

「センターの結果は、まあ合格圏内というところ。そんなに焦ったりしない。」「もし僕が浪人という事になったら、勉強のやり方は分かったので、予備校へは行かないで自分でやることにした。父の事は一旦棚上げして、大学に入ってからまた考えようと思う。」

2次試験が終わるまで面接を休む事にする。

; X+1年3月

A君から電話があり、合格したとの知らせだった。

21 ; X+1年7月 最終回

夏休みで帰省していると言う。「研究史の授業でびっくりした。20代ですごい研究をした人や大きな仕事をした人が沢山いる。僕がその年になった時、そんな力が付いているのだろうか。」「クラブはいくつか候補を見学してから決める。アルバイトもするつもり。」「父も母もやれやれという様子だ。」

IV・考察

考察は次の2点で行う。1点目は、21回の面接を通しての彼の変容の軌跡、即ち彼の「生まれいずる悩み」とその軌跡を辿る事である。2点目は、彼を取り巻く環境が彼の変容に与えた影響の検討、別言すれば、母・父・妹・家庭の文化・学校・学級集団・大学・カウンセラーが為した事についての検討である。紙幅の制約もあり、今回はカウンセラーについての省察に止める。「割愛した」前の7者については、是非別の機会に論究したい。

<考察 その1> 「生まれいずる悩み」とその軌跡

【本事例のテーマ】

父への怒り、学校への違和感、大学受験への疑問を契機として始まったこの事例のテーマは次の2点であると考えられる。

- ①「決定」することの不安と混乱を道連れにしつつ、「決定」に至るプロセス。
- ②所属集団——学校・クラス——に対する疎外感と、その克服のプロセス、即ち傍観者から主体者への変容のプロセス。

このテーマに沿って検討すると、#9を大きな節目として全体を3期に分ける事が出来る。

【各期の吟味】

【第1期；怒り・喪失感・混乱の噴出から、方向性の予兆へ】#1～#8

先ず、父への怒りと学校での違和感が語られた。「学歴が大切」と言い続ける父に対してA君は、「自分の劣等感を、僕にぶつけている」と捉えている（#1・2・3・6）。「他には厳しく、自分には甘い」父が、「電話口でぺこぺこして謝って」いたりする姿を腹立たしい思いで見えており（#6）、「父は性悪説なのです」と言う（#7）。

父の勧めに従って入った塾の特進コースで、初めて取り残されたような思いを経験したが、このエピソードは同時に、自分のペースで事に当たる彼の姿勢を物語っている。

中学校もまた、スタートから不調だった。楽しい小学校生活を共に過ごした人達を「僕は切り捨てた」と思い、他の生徒達も皆そうであろうと思うと、「何もかも嘘っぽく」感じられた。友達を作ろうと無理をする事にも次第に疲れを覚えるようになり、体育祭やクラブ活動でも「取り残された思い」をした。

また、「学校のシステム」や親の圧力から解放されることへの期待も無駄になった。「勉強する事が何にもなっていない。成績のよい人は評価され、悪い人は軽蔑されて道化のように振る舞っている。それらを見ていると虚しくなる」日々である（#1・2・3・5）。

折から学校は、文化祭準備の時期である。クラス対抗演劇コンクールで彼のクラスは、「新リア王」に取組む。クラス員の知性、実践力、リーダー層の計画力、組織力、管理力には目を見張る。彼は素直にリーダー層を評価し、クラ

ス員達の各々の輝きに感動を寄せる。そして、「その中で僕は何の取り柄もない」と語る。書道部の特性を生かして舞台背景の担当となった（#4・5）。

仕事は順調に進んでいく。「こういう事をしていると結構楽しい」「デザイン関係に進むのもよいかな」と感じ（#6）、更には「造形・デザイン関係に進みたいと思いついている」と語る（#7）。進路の方向性が見え出す中で、受験に対する彼の疑問は膨らむ。筆者の助言もあって（#6・7）、彼は父に自分の思いを話す（#7・8）。話しながら、自分のやりたい事は舞台装置やインテリア、環境デザインのような事なのだと気付いていく。父はそれに賛成しつつ、いつもの持論を繰り返す。

「僕は恐いのです、このまま大学へ行って又あの時の気持ちを味わうのが」とA君は言う。中学校入学による喪失の無念さが再度語られる。「多くの物を失った。心の通う友達、楽しい時間、明るい空気」、「何ひとつ楽しい事なかった5年余りの時間」、「このまま受験するとそれら（の喪失）を肯定し容認した事になる」。そう言いつつも夏期講習などの現実対応をしている自分がいる。

せめてその間の苦渋を父に分かって欲しいと彼は思う。「そうすると今までの事を認めた事にはならないし、父に流された事にもならない。受験についても気持ちが変わってくると思」（#7）い、父に話した。受験に関しては、父の言に反論出来ず「説得」された。しかし「説得された以上、受験しなければならない。受験する意味を自分で見付けねばならない」「だけどそれ以上進まなくて」と彼は語る。筆者は、「思いついた事をメモしておく、整理がし易くなりますが」と伝えた（#8）。

〔第2期；自己発見、クラス員への眼差しの変化、集団との一体感、自己効力感、受験の決意〕#9～#14

A君は自己発見をする。自己の思考がネガティブである事、立場や役割の獲得が自己の実感と安心感をもたらす事の2点である。この発見は以降の彼の歩みに大きく作用する。

書道部長として果たした実績を想起し、家庭においても「父が僕の事を大切

に思ってくれている事には確信がある。家の中で大切な存在であるとの思いに揺るぎはない」とプラスの視点から語るのである（#9）。

この視点は学校へと広がっていく。昨年の担任との交流を振り返り、現担任の指導姿勢とそれに応えているクラス員達を評価する。文化祭準備も「やらなければならない事はやり」、「せめて入賞はしたい」と言う。孤独な傍観者から、クラス集団の主體的構成員への移行が見られる（#10）。

文化祭準備は佳境に入った。以前にも増して彼は、クラス員の輝きを発見し賛美するのであるが、嘗てのように（#5）自らを嘆いたりはしない。寧ろ「しっかり自分の部署をやろう」と思い、クラブでやり遂げた事を再び満足感を持って思い出すのである（#11）。

演劇コンクールは、全学1位であった。彼はこれを我が事として喜び、笑顔で伝える。今はもう、クラスやクラス員達を評価し承認するだけではない。審査員の講評では彼の仕事にも言及され、自分もまた役割の完遂を通して、その一員として位置していると感じるに至ったのである。見かけの華やかさではなく、内容の確実さが評価された事を「僕のクラスはそういうクラスなのです」と誇らしげに語る。この一体感と自己効力感が、受験の決意へと向かわせた（#12）。彼の選んだC学部はB大学全学部の中で、将来就きたいと思っている仕事に最も近い学部である。

父との対立は続くが、「父のことと受験とは分けて考えようと思う」と語る。父の言動に対しても冷静である。「出て行け」と怒鳴る父に対して、「僕はまだ自分では生きられないのでそんなことを言わないで欲しい」と伝えた（#13）。

“本当の”受験勉強が始まった。「初めて自分の意志で決めた。合格したら自分の意志でやりたい事を見付けよう。大学を卒業して、早く親から独立したい」と言い、父についても「物事は一気に変わらない。自分に力を付けるしかない」と言明した（#14）。

〔第3期；受験勉強・喪失感の受容・合格〕#15～#21

学校は受験準備一色である。「受験することはもう決めたこと」であるが、しかし受験してしまうと、「ずっと大切にしていた考え、生きることは学歴で

はないという考えを捨てることになる」と語り、長い沈黙の後「喪失感を感じます。もう戻れないという」と呟く。筆者が、「決定した方向に歩を進めようとしつつ、喪失したもののへの愛惜に立ちなずんでいるという感じでしょうか」と問うと同意し、「僕も何時かは本を書いてみよう」と語る（#15）。嘗てのように喪失の無念さをぶつけるのではなく、過ぎ去っていく日々への静かな愛惜の思いと、喪失を彼が受容したことを感じさせるひとときであった。

彼は受験勉強に集中していく（#15）。「今まで全身全霊掛けて物事に取組んだことがないと思う。今はそれが必要と思う」「他を変えるのは難しいが、自分を変えるのは出来る。それをやろう」と述べる（#18）。

センター試験が終わった。「結果は、まあ合格圏内かなというところ」であり、「過去の問題をやっているが、解けなくてもそんなに焦ったりしない」ようになった。「浪人になったら、予備校には行かず自分でやろう」と思い、「父のことは一旦棚上げして、大学に入ってからまた考えよう」と言う（#20）。

3月、A君から合格したとの知らせがあった。夏休みの帰省時に最終面接を持った。先人達の優れた業績に素直に感動し、「僕がその年になった時、それだけの力が付いているだろうか」と語る（#21）。主体性を持った大学生A君の、誕生である。

<考察 その2 それぞれの為したこと> ——カウンセラー——

カウンセラーが為したことの考察は同時に、彼が来所し続けた理由の解明でもある。

彼は多くを語ったが、筆者に判断を求める事は1度もしなかった。「僕は相談をしているのではなく、カウンセリングで自分の考えを纏めているのだ」と母に語っている（#17）。「1人で考えていて、自分の考えていることが変なのかどうか、他の人に聞いて貰いたいと思った」（#18）。利害関係のない、中立公平なカウンセラーという立場の者になら、彼は安心して自己表出が出来る。「ここでは、カウンセラーとそれを受けている僕という立場がはっきりしているから、話が出来ると安定感がある」（#9）と語っている。

筆者は当初から、彼の真摯に悩む姿勢と自己省察力、その言語化の能力と努

力に敬意を払っており、折に触れて彼に伝えてきた。勉強することの意味に懐疑的な彼に、「勉強は思考訓練。それが貴方の考える力、批判する力、言語化する力、迷う力、悩む力になっている。17歳の課題をしっかりとこなさっていると思いますよ」と伝え（#3）、「僕は何の取り柄もない」と打ち沈んだ時に「そんなに自分を深く厳しく見詰め、且つ語ることをしている。それはすごい事ではありませんか」と伝えている（#5）。

映画の嗜好についても、『ブリキの太鼓』がよかったと語る彼に、鑑賞力の高さに感服すると共に、「変化」という名の喪失を拒んだ主人公オスカルへの共感が内包されているのではないかと思いを馳せた（#8）。

他者から「悩む事は人間として良質の事」との承認を得た彼は、問題解決に向けて挫折することなく悩み、且つ語り続けられた。「こんな方法もあります」という提言を筆者は2度している。父に思いを話す事と、考えをメモする事の2点である。彼はそれを彼流に採り入れ、事態の進展へと導いている（#7・#9）。

自ら下した受験の決定は、しかし同時に、彼が永年愛惜し憧れてきた考え方・生き方との決別であり、一つの時代との別離でもある。「喪失感を感じます、もう戻れない」と彼は呟いた。惜別の深い哀しみの中に、筆者もまた共に立ち滞んだのである（#15）。

承認と理解の実感は安心感を呼び、現実対応を可能にし、他者への寛容も生む。自分が家族にとって大切な存在である事に確信を持ち（#9）、父との事についても受験とは分離して考え（#13）、「一旦棚上げして、大学に入ってからまた考えよう」と思う（#20）。彼に対して辛辣な妹に対してもその行動力を評価し苦労を思い遣り（#13・16）、駐輪場での出来事も彼の変化を示す挿話である（#18）。

また未来の自己像についても、「会社員か何かになって、1人で生きて親の世話をしながら休日に好きな事をやっているのではないか」（#3）が、「20代で凄い研究をした人や大きな仕事をした人が沢山いる。僕がその年になった時、そんな力が付いているだろうか」と語るに至る（#21）。優れた業績を上

げた人々の中に自己を参入させるに至ったのである。傍観者から主体者への彼の変容である。

「必要なのは『愛』であって病気を治す『奇蹟』ではなかった。人間は（中略）自分の悲しみや苦しみを分かち合い、共に涙を流してくれる同伴者を必要としている」。「人間が（中略）正直、率直におのれの内面と向きあうならば、その心は必ず、ある存在を求めているのだ。（中略）それは感傷でも甘えでもなく、他者に対する人間の条件なのである。だから人間が続くかぎり、永遠の同伴者が求められる。人間の歴史が続くかぎり、人間は必ず、そのような存在を探し続ける」（遠藤・1982）。

筆者は宗教を持たないが、遠藤のこの2作品のテーマである「永遠の同伴者」としてのイエス像は、カウンセラーがなし得る役割と呼応しあうと考える。語り寄り添った同伴者の存在は、彼が自ら歩を進め得た事の一助は担っていたであろう。

V・終わりに

現代の日本社会にあって青少年も成人も、自己の悩み・疑問・課題等に納得を得るだけの時間を持つ事は困難である。その中で、不本意な思いを残しつつも社会に妥協せざるを得ない事が多い。また知的作業への恐れから、それらに封印して現実社会に生き、やがては存在した事すら忘れていく事も少なくない。「惑いと彷徨」の困難な状況なのである。

その中であって、疑問と真摯に向き合い、動揺し、孤独感に苦しみ、それを通じて課題を克服し成長していったA君の誠実さは感動的でさえある。そのような軌跡を辿れたのは、①家族が彼を愛しており、それが本人に伝わっていた事、②その確信に支えられて、父が拒絶的と思われる言葉を発しても、自分の考えを表明出来るという素直さやゆとりがある事、③問題があった時に、解決方法について探索し、適切と思う方法を選択し実行するという、調査力・思考力・行動力を有していた事、④その結果として今回はカウンセラーという立場の第三者が関わった事、の4点が指摘出来る。

青年期にある者が、様々な既成の事実に疑問を抱き苦悩するのは、発達課題

達成のための必須要件であり、誠実且つ充溢した生の証左である。しかし、苦悩の質と量を競い合い、議論し合いつつ自らの自負心と存在意義を強化していくという交友関係は、もはや存在しない。これは現代日本社会が形成した特質といえるであろう。

面接をしつつ筆者は、有島武郎の短編『生まれ出ずる悩み』を想起することがあった。もとより木本青年と A 君は異なる。これを十分に深く意識しておかねばならない事は、具体的ケースと向き合う場合の前提である。しかしこの2人は、次なる局面に歩を進め、「生まれ出ずる」為に通過せねばならない「悩み」と誠実に向き合った点に於いて同一だと考えるからである。その上で「生まれ出ずる悩み」最終章を掲げておく。

「君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春がほほえめよかし……僕はただそう心から祈る」(有島・1998)。筆者の思いもまた然りである。

参考文献

- 赤岡美津子 2011「思春期におけるキャリア教育の進め方：カウンセリングの理論と技法によるアプローチ」『人文研究論叢・第7号』（星城大学）
- 有島武郎 1998「生まれ出ずる悩み」『小さき者へ・生まれ出ずる悩み』岩波書店
- 氏原寛・菅佐和子編 1998「思春期のころとからだ」ミネルヴァ書房
- 遠藤周作 1983「イエスの生涯」新潮社
- 同 同「キリストの誕生」同社
- 岡田康伸編 1987『子どもの成長と父親』朱鷺書房
- カロッサ, H. 1990(手塚富雄訳「美しき感いの年」) 岩波書店
- グラス, G. 1978(高本研一訳「ブリキの太鼓」) 集英社
- 小林和 1987「友情の発見」馬場健一・福島章・小川捷之・山中康裕共編『日本人の深層分析 10』有斐閣
- 佐治守夫監修 1995『思春期の心理臨床—学校現場に学ぶ居場所作り』

日本評論社

霜山徳爾監修 1998 『母と子・思春期・家族—子どもの心を理解するために』

金剛出版

馬場健一（1987）「青年期とは何か」馬場健一・福島章・小川捷之・山中康裕

共編『日本人の深層分析 10』有斐閣

山中康裕 1978 「少年期の心」中央公論新社